



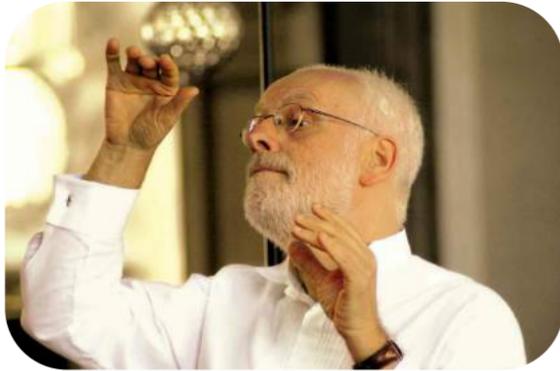
Les Amis de l'Orgue de Tokorozawa MUSE



Pray for 熊本

まだまだ熊本では余震が続いているようです。先日関東で地震が起こった際、丁度ミューズのオルガンで演奏していた私は、その轟音にすっかり恐れをなして自主避難。。。しっかり補強されているので落ちる心配はなくとも、5000本近くのパイプが一斉に揺れてガタガタと凄い音がしますので、少しの揺れでもかなり怖いのです。熊本のオルガンたちは、果たして大丈夫なのだろうか？という心配もふと頭を過ります。一日も早い復興をお祈りしながら、演奏家の立場から少しでも力になればと考えています。

🍏6月26日(日) トン・コープマンのオルガン・リサイタル大特集🍏



今回のオルガン通信は、いよいよ今月末に迫ったトン・コープマンのオルガン・リサイタルに向けて、コープマン大特集をお届けします。これを読めばきっとコンサートに足を運びたくなる+さらに演奏会が楽しめること間違いありません。コープマンの所沢ミューズでの演奏は13年ぶりと言う事で、もう既にチケットをお求めの方も多いのではないでしょうか！

ちなみにオルガン公演において、私の個人的なお薦めの席は大ホール左右のバルコニー席後方です。音の輪郭も程よく聴こえ、残響も丁度良い具合にオルガンの音とマッチします。まだお求めでない方は是非今回、お試してみてくださいはいかがでしょうか♪

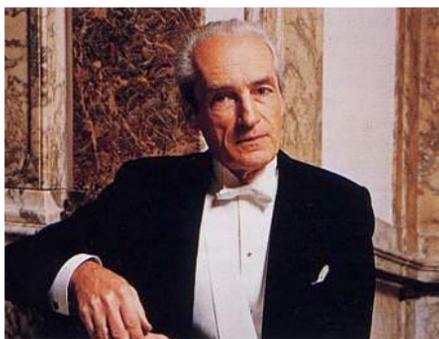
🍏その① 世界のトン・コープマン！その魅力とは？

今や動画サイト「Youtube」などでオルガン作品を聴くと必ずと言って良い程最初に出てくるのがこの方の演奏。ある時には指揮者に、そしてまたある時にはオルガニストに、チェンバロ奏者に、と実に様々な顔をもつトン・コープマン。この多彩な活動をみると、古楽に詳しい方はある日本人の音楽家を思い浮かべるのではないのでしょうか？そう、それはバッハ・コレギウム・ジャパン音楽監督の鈴木雅明氏です。トン・コープマンは鈴木雅明氏の師としても有名なのです。



奥様でチェンバロ奏者のティネ・マトー氏と。!

オランダのツヴォレという街に生まれ、アムステルダム音楽院で音楽理論、オルガンとチェンバロの両方を学びます。弱冠25歳という若さで自身初のバロック・アンサンブルを結成し、その10年後の1979年にアムステルダム・バロック管弦楽団&合唱団を設立。バロックのレパートリー、とりわけJ.S. バッハの音楽の演奏に定評があり、古楽器によるアンサンブルの指揮者としてもその名を世界に轟かせました。同じくオランダ人で、師である古楽界の偉人**G.レオンハルト** (写真左) が4年前に亡くなり、アーノンクールら名匠が次々この世を去る中、トン・コープマンは古楽界の重鎮として学術的な視点や徹底した研究から当時の奏法を探り、正統派の演奏解釈を追求する一方、常にカリスマ性溢れる斬新な音楽を生み出す貴重な存在として、今も圧倒的な存在感を放ち続けているのです。



私もパリで一度、コープマンのバッハ作品の講習会を受講したことがありました。あのトン・コープマンから指導を受けられる！と私達学生は期待を胸にこの日を迎えました。小柄な体格に穏やかな笑顔、鋭い眼光。しかしひとたびオルガンの前に座ると、オルガンが壊れてしまうのではと心配してしまうくらいの覇気を感じさせる音の息吹を生み出すのです。古楽ブームが定着した現在、その異次元的な音の捉え方、斬新な表現、バロックの概念を覆すかの様な装飾音やビート感を目の前に、コープマンにしか表現できないバロックの形を目の当たりにした瞬間でした。

🍏その② コープマンが弾く！オルガンの名曲の数々を徹底解説♪

プログラムを見ると、バッハはもちろん北ドイツ、オランダ、フランスといった実に様々な国の作品が並んでいます。前半はコープマンが育ったアムステルダムで17世紀に活躍したスウェーリンク、若きバッハに多大なる影響を与えた北ドイツの巨匠ブクステフーデ、フランスのパリで18世紀に行列が出来るほどの人気を博したダカンの作品が続きます。その後、それらの影響を一挙に取り込んだバッハの作品達。後半はバッハとその弟子ホミリウスの作品を通し、バッハの神髄に迫る、という聞き応え抜群のプログラムとなっているのです！裏面では、その全貌をご紹介します。





◀◀◀前半のプログラム▶▶▶▶▶

- D.ブクステフーデ：(1637-1707): トッカータ ヘ長調 BuxWV157、前奏曲 ニ長調 BuxWV 139
『わが魂よ、いまこそ主を讃えよ』 BuxWV 214/215/213
- J.P.スウェーリンク：(1562-1621):大公の舞踏会、エコーファンタジー イ短調
- L.-C.ダカン(1694-1772)：『イエスがクリスマスにお生まれになった時』
- J.S.バッハ (1685-1750): 『装いせよ、おお、魂よ』 BWV 654
『目覚めよ、と呼ぶ声あり』 BWV 645
幻想曲 (ピース・ドルグ) ト長調 BWV 572



前半の聴き所は、バッハが影響を受けた音楽を中心に行っている所でしょう。あらゆる国のバロック・レパートリーに精通するコープマンならではのプログラミングで、それぞれの作品をどのように「弾き分け」るのか、とても楽しみです。北ドイツの作曲家のブクステフーデ (写真左上) による、即興的な要素溢れるトッカータ作品や同じコラールに基づく3つの異なる手法で書かれたコラール作品。ルネサンス・ポリフォニーの神髄を感じさせる対位法の大家、オランダのスウェーリンク (写真右上) による、イタリアの舞踏メロディに基づく変奏曲や鍵盤間を行き来するエコー・ファンタジー。フランスのノエル (クリスマスの歌) に基づく、ダカンの彩り溢れる華やかな音色を使った大衆向け変奏曲。前半はこれらの要素が全て線でつながるかの様なバッハの作品で幕を閉じます。

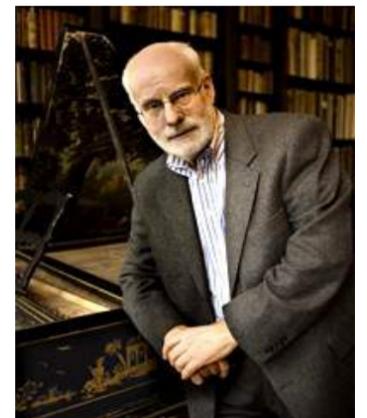
◀◀◀後半のプログラム▶▶▶▶▶



- J.S.バッハ：小フーガ ト短調 BWV 578、『天にいます、われらの父よ』 BWV 682
- G.A.ホミリウス(1714-1785)：『我が神よ、われ心を汝に捧げん』
- J.S.バッハ：パッサカリア ハ短調 BWV 582

後半はバッハ中心のプログラムです。日本の音楽教育に欠かせない「小フーガト短調」に始まりますが、コープマンの「小フーガ」は日本の中学生が普段鑑賞している様な、皆様の馴染み深い解釈からはかけ離れたものになると思います。今もそのように演奏されるかわかりませんが、後半のバッハ作品はどれも非常に有名で頻りに演奏される作品ばかりなので、私自身もどのような演奏を聴かせて頂けるのかワクワクしております。クラヴィア曲集第3巻に収められている「主の祈り」で親しまれている賛美歌に基づく壮大な5声のコラール編曲作品『天にいます、われらの父よ』の後は、ドイツのライプツィヒでバッハにオルガンを師事し、ドレスデン聖母教会でカントーラとして活躍したG.A.ホミリウス (写真左上) のコラール作品で少し穏やかな気持ちに。

リサイタルを締めくくるのは言わずと知れたバッハの秀作「パッサカリア」です。この作品の解釈は様々で、とりわけパッサカリアの部分(この作品はペダルで奏される低音主題による変奏曲によるパッサカリアとそれに続くフーガで構成されます)の音色遣いに注目しています！終始オルガノ・プレノ(ミクスチュアを含む煌びやかな音の組み合わせ)の響きで弾き続ける奏者の方や、変奏曲らしく音色を変化させていく解釈など、演奏するオルガンによっても変化するこの作品を、コープマンはどのように演奏して下さるのでしょうか。さあ、みなさま、6月26日は歴史に刻まれる演奏をどうぞお聴き逃しなく！！



🍏7月2日(土)は人気のオルガン特別講座(前期)が開催されます♪



所沢ミューズでは、オルガンスクールにおける実技レッスンだけでなく、オルガンの歴史や仕組み等を学ぶための講座を年2回、一般の方もご参加頂ける公開講座として実施しています。昨年からは、資料を改良して更に分かり易くなりました。オルガンスクール上級講師の松居直美先生による詳しい説明は、初めての方も、もう一度しっかりオルガンの事を知りたいという方も必聴です！アークホールにある日本最大級のオルガンを目の前に、前半はオルガンの歴史や基礎構造を、後半は音の出る仕組みや音色の組み合わせを、デモンストレーションを交えてたっぷりとお届けします。

7月2日(土)13時から、要事前チケット購入の100名限定となりますので、ご興味ある方はお誘い合わせのうえ、是非お越しください！皆様のご来場を心よりお待ちしております♪